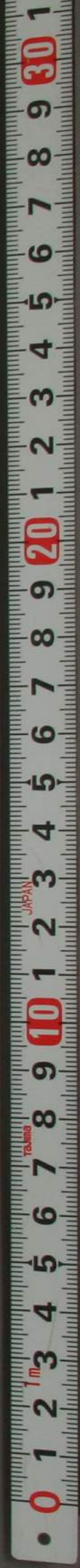




荆國起原

持  
リ 5  
2110  
50



特  
2110  
50



開國起原卷四十九

慶應年間邦内之形勢三

慶應二寅年五月十六日 和泉守相渡

毛利大膳父子所裁許去<sub>レ</sub>朝日別紙<sub>レ</sub>連名代<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>

於藝州表中渡<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>中渡<sub>レ</sub>趣早<sub>レ</sub>歸國<sub>レ</sub>主人<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>達

以上來<sub>レ</sub>也日迄<sub>レ</sub>法言美出<sub>レ</sub>様未<sub>レ</sub>達

毛利大膳

毛利長門

毛利大膳毛利長門家政向不行屆家來者黑印  
軍令狀一冊持京師古札入

禁闕、幾砲不恐 天朝不業不屆玉極二付可被

慶嚴科之受任用失人益田古備門介福原越後國

司信濃於出先條之主意取失及暴劫之役罪科難

遁深恐入三人之首級備安檢從參謀者共斬首十付

寺院發居不慎亦由昔自判之書面之申立之後出於

惑之件之申之付大目付志目付之申息問之交弥

恭順謹慎亦由了立之趣之申申屆亦成之由之來

臣下統帥之道之失家來者者玉犯 朝敵之罪之役共  
科不控不埒之玉之去祖先以來之勤功之 思名拾分  
寬大之由主意之順序 養國之上高之内十方石之 名上  
大膳之發居隱居長門之永整居之仰付為家督真丸  
之廿六万九千四百十一石之下家來右備門介越後信濃家  
名之儀之永世可為新統旨之 仰出

長州より出發し人々

殺家先格

実戸備後介

上下四十人程

徳山家老

福間式部

同用人

飯田市郎右衛門

合上下六拾人

岩國家老

今田敦貞

同用人

目加真田喜助

山縣 佳衛

上下三拾人

長有家老

海舟書屋

毛利伊織

上下三拾九人

同用人

金子 廿部

三島任三郎

合上下三拾五人

清木家老

平野市郎左衛門

上下三拾人

毛利伊織

福間式部

原野々右衛門

今田敦貞

毛利左京

毛利淡路

毛利護岐

吉川監物

別紙申裁許之趣毛利大膳毛利長門毛利真丸名代  
実戸備後介之可中渡交同人病事押合之趣取出之旨  
方共之ヲ大膳始之可中連

五月

右之通主人之可中連

海舟書屋

毛利真丸

今般祖先之舊功之思名其方之家督之下上之如前  
之長州萩之段居城大膳長門之同下之美玉左京淡路後  
岐吉川監物之委子家政向一新領内淡路靜又祖之旧  
徳之補之極心息專之可中抽忠勤

末家家老

吉川監物家老

別紙之通毛利真丸名代実戸備後介之可中渡交同人  
病事押合之趣取出之旨方共之旨真丸之可中連

毛利左京

毛利淡路

毛利讃岐

今度大儀父子以智之仰自真丸之家督之下各得之  
意之方也并吉川監物一同中務家政向引文宗家輔豐  
領内政法靜後來决之其苦勞不其成急度取締其喜振  
可之励誠忠

吉川監物

右同文言之方并毛利左京毛利淡路毛利讃岐一  
同中務家政向立引法

毛利真丸家老

海舟書屋

今度大儀父子以智之仰自真丸之家督之下末家并吉  
川監物之家政向引文監物之重立取投宗家扶翼領  
内政鎮靜後來其苦勞不其成急度取締向其立可也  
未達之寫家老也一同中務幼主補佐力之奉一取締急  
度心附家政一新政之振可抽忠勤

末家三勢

吉川監物名代 四人

別紙之類毛利真丸家老也一同中達也

毛利左京

毛利淡路

毛利護岐

吉川監物

於江戸下屋交揚而美之追言在達三可方不  
毛利 貞丸

其方家來世之内是道激し及暴動者といへとも  
悔悟改心波に於言一切内揃るに右に加り百姓  
所人其勿端之餘に者世も速に其家より立度路に  
本業を励可中にも右紙言杉晋作桂小五郎以下  
之者世に尋ね候有るに早に度出表に美出に  
可成

海舟書屋

別紙

高杉晋作 桂小五郎 小田村文助

村田欣郎 太田市之進 波多野金吾

天野謙吉 北条瀬兵衛 林 主税

山縣半藏 佐々木男也 佐瀬八十郎

毛利 貞丸

宍戸備前

右に昔先年来大徳家政向取締り美厚心息に由り  
當時退隠水車に於て今般大徳父子 所裁許中

渡方の家督の下家政向一新領内徳静の振中渡  
自早の任用可也

毛利真丸

今般大儀父子所裁許中渡方の家督の下家政  
向一新領内徳静の振中渡自先年来大儀家政向  
取帰し弟厚心息の永井雅樂等同振し者中當村  
退役又々然書中付有し其趣に在り間夫の任用  
可也

毛利左京

毛利澄路

海舟書屋

毛利讃岐

吉川監物名代

四人

今般中渡の所裁許の趣早に渡帰國主人の中達  
止表の七日止大儀始末の文書差出の振可中達

毛利家名代の者帰國達才の趣預言

返り四日幸款頼の書才の趣中書居難に成る付而差下  
在成の尤款頼の品に寄 所裁許の改關係の事は中探  
用其の宜しき旨急度中心得に振取言取の趣一應也



畏れお交地度市家、水沙法、趣、付國內人心に關係せし、  
將惑を、生道跡、未塞、歸、邑、容易、高森、群、滞、在、幸、苦、地  
時、水、堂、の、為、地、段、の、情、察、を、成、下、進、之、の、得、已、情、定、款、額、  
可、任、の、美、も、可、有、の、由、也、の、為、且、度、の、合、の、主、の、根、以、の、序、の、森、也、  
根、の、仰、上、主、の、下、度、依、の、幸、泣、禱、の、以上

五月十日

末家 各代家 走

右言西五月十三日獲物留守居植田清人等出  
左、是言未渡

世

海舟書屋

書面之趣、主條、美、事情、可、方、の、由、也、廿日、の、期限、進、延、の、  
美、不、未、成、の、間、支、の、者、有、の、道、跡、未、塞、の、美、の、何、根、也、故、  
説、論、の、一、美、伏、の、由、の、故、也、

中、款、許、の、拒、の、未、成、の、付、討、破、の、言、も、違、命、の、美、取、斗、可、中、  
自、然、手、餘、の、次、言、も、の、の、期限、未、進、の、故、内、早、の、可、中、出、言、  
可、未、進、の、故、所、款、許、の、故、罪、係、の、款、後、書、言、の、以後、  
決、台、取、次、中、号、交、の、事、也、

五月十三日

本家毛利大儀父子 所款許、並、末家中、の、仰、渡、之、趣

去朔日於度考表名代之者以達出望小彼彼是幸恐合  
 於之國國士民之情狀中以初式容易之漢論以在代  
 是是東次才之已名代在公中上出之仍其尚毛利左京  
 始之申合度考出望之者名代之者歸邑掛達中不都  
 合之起之方之漢代者歸邑掛達中不都  
 速中代之都合能出來甚以痛心在立中不取敢  
 私不小孩中出之微裏之程出亮察方成下此上幸恐合  
 得之當月七日之期限何幸捨別之出沙汰之出當  
 月廿九日之小程錄之仰自下之樣  
 公邊向之且交之概成之程備之幸款願以上

海舟書屋

五月十八日

吉川監物

松平安藝守

毛利大膳父子 所款許中後古法言其出之期限差  
 史之候越古成苦之得也此度吉川監物其出之言而之趣  
 是餘美其少之願之通來之廿九日之程錄之義美在  
 萬一古期限之請言之其出之即  
 所款許速省之自速之問罪之師而美向之成之問此候  
 可之達也

去十九日於薩州表吉川監物より出の言由并松平左衛門  
吉川に連の言付字に連の旨を承り十九日期限に  
清言の旨を問罪の師を差向の間跡来月五日迄に  
一同歩入の様可成に在清言の旨に連の言由可  
有に

右の通口に討手より西に在連の旨に候為以清の供了石  
以上以下に南に可成連の

五月十八日差出別紙の通由候

長沙使者

海舟書屋

野村右仲

同家守使者兼  
吉川監物使者

飯田四郎兵衛

吉川に連の言由紙の通由の旨に自差出の旨に候に付之  
年来の運合の旨に在候旨に甚苦心に候に付之裁断に  
下振付候旨に候に付之

五月十八日  
松平左衛門内  
西本清助

別紙

今般の連の言由に自実戸備後介并私共名代一同の地  
所在の旨に候旨候介并小田村素太郎候に付之

趣者、昔藩、水、後、仰、何、之、故、不、幸、存、國、情、  
益、難、感、之、重、更、之、落、不、任、聊、名、義、之、明、一、條、理、  
之、正、之、職、否、判、必、明、晰、予、て、賞、之、為、て、天、下、悅、後、之、罪、  
を、蒙、て、天、下、畏、後、仕、事、即、堂、

勅、裁、台、命、之、以、以、一、度、令、せ、ら、れ、ハ、終、始、之、論、  
事、之、可、方、之、交、最、初、之、藩、若、宗、家、名、代、之、結、成、後、  
水、沙、之、交、終、之、後、後、介、病、氣、在、其、中、私、也、名、代、之、若、  
水、連、言、水、渡、之、後、仰、自、備、後、介、以、用、一、連、之、以、水、也、  
居、之、交、右、之、用、不、之、仰、進、之、水、事、尚、又、後、後、介、素、之、郎、  
別、後、水、用、方、之、中、之、澤、立、之、仰、自、之、交、不、回、之、俄、之、幽、閑、

海舟書屋

之、仰、自、之、名、之、明、ら、し、之、理、之、正、之、水、事、之、能、知、殊、主、命、  
を、奉、之、其、越、居、之、若、水、體、責、之、義、之、道、極、之、一、万、一、事、之、  
誤、之、事、之、水、中、之、其、主、人、之、此、度、之、可、之、仰、自、之、交、之、  
之、之、實、之、國、情、洵、之、終、終、感、之、重、也、水、成、之、之、之、  
次、之、也、有、之、別、之、水、連、振、之、後、之、殊、之、名、義、之、之、為、明、條、理、  
之、水、正、之、之、仰、自、之、之、國、内、悅、後、仕、事、之、其、覺、東、却、之、  
勅、裁、台、命、之、輕、易、之、若、考、之、振、立、之、之、水、事、之、其、出、未、之、  
難、計、之、恐、入、之、自、後、後、介、素、之、太、良、之、之、格、外、中、之、水、審、  
可、之、仰、自、之、助、之、之、代、之、幸、存、之、何、之、之、急、速、之、其、返、之、  
下、之、振、之、周、旋、之、程、他、之、之、依、賴、仕、事、之、以上

五月十八日

三三

毛利左京

毛利澄路

毛利澄岐

吉川監物

本月二日出使者之由達 幕府内沙汰之上 大膳父子并  
 真丸同月廿一日度寄表に可不出程病氣ニハハ末家并  
 一門之内為名代可不出末家三身吉川監物並同振ニ  
 病氣ニハハ押之由出程可仕押之由病氣ニハハ重臣之内  
 可美出左多家名代之者大膳父子并真丸名代ニハハ

海舟書屋

市成等も之由書取由達未成り故二國臣民情憂切迫り内  
 鎖持手段ヲ加後後分ニ由地ハ由達期限通不ハ振中付  
 言ハ於途中氣分ニ由替期限一日後ハハ二付中後後後分  
 少ハ屆中出程先急ニ末家ニ老々も款預仕由國御表ハ  
 内ニ後後物由煩持病ハ由添引籠瘵表仕ハ交中月朔  
 日國奉寄ハ可不出古由達ニ自有新漢書及以中出ハ病  
 氣押之由可不出振再應之由達ハ由中ハハ是是部ハ腫物  
 起不ハ任心慮容許ニ故言ハ以漢書由席了後中出ハ由也  
 是又ハ同御不ハ成末家并吉川監物名代也備後命ニ  
 不ハ拘國奉寄ハ不ハ振中由事ニ自有得之由不ハ由

文書目三十五後後介旅宿二六後自付の医師の診察病  
 後後介の仰付由の傳達不達の役の引文の上心得  
 二六の傳達仕居の事候二六評議事二六成候二六役  
 二六美越三六の傳達傳達傳後介二六仰達  
 序款許の旨末家名代の家老傳事二六主人より大張父子  
 并真九の可成達候二仰付何の驚愕の候去自二日  
 六達の上二六如何振二六助合二六於二六問中上二六末家  
 名代二六事二六仰達二六助合二六事二六名代二六者其主人二六  
 少主人より宗家の可成達上二六由二六の事傳後介二六右六達持  
 兼一途二六事出病二六事永引二六容神二六事二六暫二六候事

海舟書屋

仰付の上取鑑の達可持兼旁の檢校の役の引文の上  
 邊二六尺二六可成候二六事候二六事二六事止二六事二六事  
 於二六事存二六右六用向二六後後介二六不二六仰達別後後後介  
 小田村素太郎の用方二六暫洋糴二六事二六達二六事二六國内  
 於二六事二六事九日新急二六國奉寺二六事二六事二六事  
 氣分未得全快の故今か二六行録二六事二六事傳後介旅宿  
 二六事二六事二六事二六事二六事二六事二六事二六事  
 傳後介素冬郎古友人の不審の由二六事仰渡二六事二六  
 二六預二六事二六事二六事二六事二六事二六事二六事  
 存二六後後介二六事二六事二六事二六事二六事二六事二六事

いふ何苦しん次才極言言義認不仕元未固情強起五  
在も抄此の事可方し外と末家て外也坂と仰付の節  
より國內一同於惑而己在法接方多候を費し百方人心を  
安慰仕漸後今之外也當表は是出の事二有し三監察  
天幕為少耳目益言の業知し上の連々仰出の付  
舊來人心の難惑も少くも未解居の度此度し初末二  
在成一同先見し是を以難淺教訴仕初也二於之も慰解  
甚難法仕の次才の察可の下の事為二切あても是之も容  
易の冬力下の事末段し一事二玉り右振未成の事誠二  
痛哭し玉り最早の罪を謝不し中必死覚悟仕

海舟書屋

義二此中不切也何卒降交し中厚誼此上高ふ為捨至弊  
藩の情實の取扱幕府の慶多し次才今一應の伺り下  
備後介共の切あても唯主命二趣の事二何れ一已取計  
義二此中不切也何卒降交し中厚誼此上高ふ為捨至弊  
頼の旁の候幕府向可然の仰達し下の振置の執案  
安藝守振の仰上可下の振置の執案以上

五月

毛利大膳 家 老

附札

書面一趣の採用不成なる差度の振可の候

五月廿六日三末家吉川監物より使者を越中發せし

美出の書面云

今殺宗家 所裁許し趣初せり大儀父子貞死に  
 可中達より旨高國內鎮持の助令力仕に振地を以て  
 名代に承せしに達より在りて全神宗家の老宗戸備後分  
 為其一途に美出の書に此者社可有仰自安に俄喜出  
 刺澤在り仰自驚惑し至幸存に珠に國內切迫し情  
 状に急口中上言通に自存に以て柄傳兼仕名代家  
 老に歸途を遮り如暫高去驛澤在仕僅に一先歸  
 邑仕に仕合に此望に就りて末家中中合度より彼を陳

海舟書屋

取期限好日と申すに自不取監物より廿九日迄期限の從  
 儀古預主漢持方より精しく詰合取急に内預出し趣申許答に遂  
 雜有仕合幸存に別中合考力仕尺も有從本士氏に控へ大儀  
 父子奉 天旨竭臣分度に他心事奮勵感激仕辰今殺  
 不容易に達書し趣有に由達に傳中仕ゆに以て以て  
 終惑憂憤石下方切迫し情を以て通款預申出猶宗家  
 の家老せりも末家中に預出し助定に幸解憂憤莫に方  
 加之宗家名代宗戸備後分預出成由傳中仕に自安に  
 又一層に悲憤之端殊更誤論漢持に方便に幾何其  
 不得止以て於私也も難止是非徹上仕に以て以て



存心無二前頃情態亦其可也只此居 台命後雍可正心付  
 所成權之假之經之押付の節之忽國內沸乱之立之了の  
 必定之有し私共支封之分として内々宗家始沸乱之勢を  
 啓き外々天下騷擾之端を成之として祖先之微功不之  
 棄厚此趣之志も亦處之何也亦其所以即國內情態亦  
 力仕の振も亦此趣之志も亦其所以即國內情態亦  
 取之仰付何事天地廣大之度量を以て上下感服仕之操  
 亦寛大之由沙汰之 仰出之下の振幸教教の存し次之付之  
 私共の由達也助之弟も于今免角之由達也古振難仕之  
 思入の此候 幕府向呈振の取成之下度幸慈禱以上

海舟書屋

五月廿五日

毛利 左京

毛利 淡路

毛利 讃岐

吉川 監物

書付

長州三木家若吉川監物名代の者より別紙にて通申上之付  
 美由中の上 所款許の關係仕の款類言を取次中より取  
 出達し趣意の先方の中達高の勢之付其新の交國情難  
 黙止次第何分も一應申上吳の振只爰申出仕之付不付止  
 其後美由中の上候申上以上

五月廿七日

松平左衛門内  
上野吉五郎

右即日小笠原忠政守於廣島表在達

右書面急之在達也 類也 有之 付別紙書面

三通差戻之 可也 在達之 振可任也

別紙

漢漢書

今般 幕府之 所裁許之 實係波之 歎願書之 決之

以取次之 或召友者之 仰出之 辰之 通達之 下之 交後之 國

情徹上 不仕而已 亦之 辰之 斯之 亦 仰出之 下情益 益甚

前日之 倍從仕 設論之 手辰之 幸之 忽沸亂之 保之 遂之 天下之 禍

海舟書屋

端之 天也 幸之 必然之 勢之 自祖先以來 辰甚之 以文証 歎亦 爲

崇新厄 以神察之 下之 是非也 幕府向之 今一應 以盡力 別紙

次身 以取許 之 下之 振主人 也 幸之 歎願 之 幸之 以望 之 然

之 江波港 亦在 何之 以沙 決之 幸待 公之 處之 爲於 也

爲之 也 以混 雜之 幸且 友國 人之心 涕傷之 折柄 急念 之 物

也 亦望 之 付若 國新 港之 引之 亦沙 決之 幸待 之 以上

別紙

嘉永度外 吏之 以交 主之 也 所國 威日之 陵夷 人心

不復之 機有 之 自以 父子 模深 亦苦 惠之 爲也 幕府之

願之意 所造 幸律 侮之 亦交 主之 爲也 在度 辰亦 達白 之 感

得也 公武の間に組詰し越方は遂に戊午以来支那  
の變を醸し内憂外患

皇國未曾有の大事に付以傷亂にふた為忍辛酉年  
又の違言何分も 幕府に於て今一際

憂意中道事の冬力に成天下に於て愈々解上下の一致  
崇仰し以策を為す遂に又

大樹公序上治

勅諭台命を以中國は天下に布告す度後を以て  
仰上の交を採用し上 台諭を以て上京

取意の伺し交下田條約に要未為保止 奏聞

海舟書屋

勅許を以て之を以て後國未より拒絶堅固序約定止當時  
條約の破却を拒絶の進度 思召し以て事右に  
皇妹市東下り於五十年乃至七八年之諸吏悉く掃除  
可幸安

宸襟の如く少哲書閣を以て連名に之を差出し事右に  
以て之を以て

取意 台命を以て據るに確定し候此時始に以て伺定未  
成り候に連し以て末家後方に以て通達未成り通に終に  
大樹公序上治君臣神明に之を誓言

勅諭台命を以て據るに布告に成り候に固より以て兼知

其為立事也... 於言也... 感激... 不... 為堪聊... 當  
屏... 任... 身... 家... 以... 大... 難... 之... 為... 當... 採... 夫... 此... 魁... 之... 為... 成... 臣... 子...  
所... 獲... 詞... 賜... 之... 交... 不... 計... 也... 幕... 府... 於... 之... 以... 此... 粗... 器... 之... 以... 取... 扱...  
振... 之... 仰... 出... 績... 之... 京... 都... 以... 是... 傳... 之... 古... 成... 送... 來... 以... 父... 子... 授... 以... 心... 也...  
之... 為... 勞... 閑... 鎖... 二... 途... 也...

皇國重大之事... 自前件... 同定... 通

嚴意... 申... 道... 奉... 台... 昔... 此... 義... 順... 之... 為... 成... 曾... 之... 一... 箇... 之... 以... 私... 兄...  
之... 以... 此... 去... 就... 不... 之... 為... 成... 之... 顯... 然... 之... 事... 之... 有... 之... 以... 受... 一... 且... 也... 此... 以... 次...  
才... 之... 在... 成... 下... 之... 於... 言... 之... 一... 統... 於... 感... 憂... 憤... 之... 餘...  
則... 下... 進... 之... 歎... 歎... 任... 度... 不... 得... 止... 之... 心... 事... 之... 從... 走... 之... 變... 之... 立... 之... 立... 之...

海舟書屋

之... 砌... 外... 吏... 大... 奉... 汝... 龍... 來... 之... 交... 前... 候... 之... 次... 之... 自... 奉...

勃... 採... 夫... 也... 一... 變... 之... 一... 已... 私... 圖... 之... 次... 之... 古... 成... 之... 餘... 第... 一... 下... 先... 止...  
戰... 之... 以... 取... 計... 也... 之... 為... 及... 西... 慎... 之... 仰... 出... 之... 折... 柄... 也... 官... 位... 之... 稱... 号...  
之... 台... 上... 東... 西... 之... 以... 師... 之... 步... 毀... 從... 只... 能... 獲... 年... 之... 誠... 言... 以... 徹... 上... 之... 為...  
成... 度... 同... 列... 之... 者... 以... 下... 新... 人... 也... 以...

閣... 下... 不... 敬... 之... 罪... 之... 謝... 尾... 州... 忠... 督... 之... 陣... 掃... 之... 古... 成... 之... 處... 又... 之...  
大... 樹... 公... 以... 進... 毀... 之... 古... 成... 大... 坂... 表... 之... 同... 列... 之... 者... 在... 也... 以... 此... 也... 建... 之... 之...  
之... 後... 大... 小... 監... 察... 也... 下... 茲... 也...  
天... 朝... 幕... 府... 之... 以... 耳... 目... 之... 以... 以... 尋... 問... 之... 上... 一... 之... 國... 情... 民... 心... 也... 茲...  
意... 也... 義... 知... 之... 古... 成... 之... 交... 今... 日... 之... 玉... 之... 之... 意... 外... 之... 以... 達... 之... 仰... 出... 也... 此... 度...

以名代取之由連亦成由兼知任一統警感悲歎人情洵  
 五居別紙一通中出外之私也亦肯重役之者として西文子  
 枚也初之由寬枉之為蒙以蒙之不能幸雪之として西先  
 靈極之中既去之下有衆人之慎持制馭法之亦叶生之  
 天地之間之容之亦無之此上一死之外之由望之定之臣  
 子切迫之情不自禁枉之幸哀號之何幸正大臣當之  
 亦之判然而交之上一先靈極之由為安下之二州  
 生民之由故助之成下之樣泣血幸懇願之謹言

寅五月

西家先中

海舟書屋

謹言 幸中上之事

乍恐而殿極多事之由忠誠一朝湮滅任而已不之  
 來由國難由連之由交之由免罪之雪之鴻恩之第一之幸後之  
 事之由成生之倫之日之曠之任之事之多罪之至誠以幸  
 恐入之念之及今之般又之不容易之沙汰振之仰出之由定  
 子驚愕悲歎之至之堪之甲抑發丑以來外夷之由交之由  
 皇威日之陵遲人心不服屢由難之由生之由次之  
 亦由及殿極之由之由悲深之由力之  
 公武之由間之由為竭

朝政 台會由遵奉日夜由勉勵之由之由交之由豈因謬指百

出而寬罪次才之在場ハ臣子ノ玉情切迫シ餘ヲ甲子ノ  
變ニ立至リ得共全以幸對

朝廷不遜ノ心慮意末モ喜シ後々天地鬼神モ知ラズ  
古ノハ交事ハ柄不敬ニ涉ルモ以幸思入ル以幸ニ付國家ノ汚  
辱モ不為顧柱石ノ臣モ罪セラレ以幸友殿極恭順ノ  
以誠念也

天朝幕府ハ以露呈ニ為成ハ以事ニ有リハ交分ノ浮説  
以取用者成ハ以却也 將軍家所進世殺ニ者成ニ後

天幕ハ以耳目として三監察獲妙以下向國情民心安  
由以領事者成ハ以仰事ハ以自下ハ以誠意貫徹ハ以可

海舟書屋

有リ幸存ハ交又ハ今日ハ形勢ニ者成ハ以定ニ上天覆育ハ  
帝聖意ニ以決ハ以事ニ是偏ニ是非曲直ハ以尚且臣  
二州必滅ハ以定業ハ以暗ニ楚成仕ハ以向者ハ以最又ハ以了  
程ハ以誠安ハ以事ハ以決ハ以諒解ハ以事ハ以幸存ハ以交  
以友殿極恭順ノ以奉上一ハ以志存ハ以為渡ハ以枉ハ以  
指令ハ以通ハ以事ハ以削ハ以責ハ以成ハ以極ハ以事  
以事ハ以却ハ以名義ハ以立一步ハ以退ハ以一步ハ以進ハ  
以事ハ以二州ハ以浪滅ハ以至ハ以罪名ハ以天下萬世ハ以送ハ以人ハ以指  
以事ハ以為招ハ以事ハ以必ハ以誠ハ以甚苦急痛念ハ以至幸存ハ  
無ハ以此ハ以大難ハ以事ハ以何ハ以事ハ以取失ハ以力ハ以

於社稷之內清獲無一之上去以祖先之神怒也  
下古二州士民決之却之怨之歸生不可古之幸存也  
是正生之倫之日之曠之何也中詳此度一統議決仕  
矣有之假令 公言之出之也上件之通之條理也  
有之故之折言之奉命不任幸存之自乍恐急之  
惶敬白

丙寅五月

長防 士民中

紀伊中納言殿此度討手之面之為先鋒也督先藝州  
度島表之出張之波之松之仰出之節伯耆守事美添之

海舟書屋

美也小昔之仰出同人儀之明廿八日忠地其發是度鳴表之  
越上又京極主膳正事四國討手之面之為取締之是

慶應二寅年六月七日 勅諭

毛利大膳父子裁許之美先般經

天聽其條中達之及連宵之自問罪之師美向之  
遂 奏聞被 聞食之大樹之承之澤坂其上摸樣之  
進也之可及大儀之被 思名之達之奏進討之功可

奉安

宸襟討手諸藩之可了之昔 仰沙汰之事

毛利貞丸

一昨子年家来者其京師の出入

禁制の祭破の条大儀父子に於て之罪難道嚴科之可  
又仰付之爰恐懼謝罪三家老之首級備実檢弥恭  
順謹懐之趣に付

天幕に市主意を以格別寛典に市裁許五月朔日十渡  
同廿日限の請言可出出給に処廿九日迄於議に美吉川監  
物より預出に付兼届に交圍國士民於惑憂憤切迫之情  
状鎮持難届旨を以此上寛大に由沙汰に仰出に様三末

海舟書屋

家監物より又言而美由右期限に至り請言不呈出に是に  
至艱に國於市斟酌恩威之道を以國家に大典に正に  
交終に由請に由給に条

天幕に命に旨奉に收市裁許違背不届至極に付  
問罪に師に美向に問此旨可に心得に在梗命に者に謀  
鋤に成に由主意に付に罪に細民末に者妄に動搖  
改名交に

右に通松平安藤当交に立利貞丸美に三末家吉川監  
物に右達に問由供万石以上以下に面に可に達に

六月



長防士民泣血再拜謹言諸藩明度閣下白

主人多年 勅旨を奉り 台命に従ひ東西奔走を竭心

力に交り奸邪蔽明冤枉再生仰而天を號し交也俯而地を

哭さる不也今日之急迫は臣子も不幸中憐察可下

然れ共事既に此に至りて最早冤枉を辨解も不仕又

哀號しては救援も待たず二州の士民各臣子も分を

尽して死を以て主恩を報ひ知己を千載に下を待て公論を

百世に後仰き度心才も他事折らて奉對

天朝不遜し心底少も多う天地鬼神照明敢て赤心を

海舟書屋

披く交は中にも一様暴挙し者をもふ成程主頼は交與國に存

亡國より不論の交與主の事よりして自然天下を別表し基をも共き

外夷の術策陥りし根可成は是の迷愾も幸存の志も何卒諸

明度戮力同志上

天朝を奉戴し下幕府を扶け早く奸邪を謀戮し忠節を

登庸し天下を以て正邪判然名義を立人心一致仕は根を

身より度は左根を以て是の迷愾も幸存の志も何卒諸

神州を以て外夷を以て棄てられ根を成は事必然と幸存の志も

以て遠慮の志を度身後に多難唯此一事は中不偏の志を

下度泣血奉戴願ひ領首謹言

北達言付

永井主水正

室賀伊豫守

牧野若狭守

岡部三右衛門

大平鏡次郎

戸田寛十郎

稻葉清次郎

曾我権右衛門

海舟書屋

横山羊左衛門  
片山典八郎  
佐久間三藏

壹岐守事九州路為指揮小倉表に兵裁に付出張中  
伯耆守附添可心得

招平安養守江

江戸表に由りて預名成に毛利真丸并末家嘉永廿  
而美度成成に付之、為救助金五百支一同に下間  
可方未渡に在る金法取方に候、以勘定吟味役可方候

六月十日於小倉表小倉原是攻守之利家罪狀書英佛五公使に在渡

文一

其初永井雅樂等を以て公武両合評し事を建白し、主人も専ら其志を以て由り、朝幕共々格別ニ言せし交中、以て激不臣し、徒に誑を以て、ソツ々雅樂等正議に事ヲ殘害し、從藩長頼之徒を集り清浄し、二州を以て一團に、魔界と稱し粗豪し公卿等ニ擧手録し勿許ふとも

玉體ニ迫り大和し、行幸を勅め、京師に放火し、還幸し念を絶ち、鷹粟を己の國に遷し、

天子を挾て天下に令せん、其奸謀大惡を企し其罪一

文二

攘夷し詔五月十日期限し、朝命も幕府より傳へ亦襲

來し、故に掃攘可ぬ古し命も幕府より示され、其陽を

勅旨を奉るるを名として、陰に幕府に不都合を醸さん、其奸

計より能く來り、其事通行し、高松に破散し、公卿を誘

引し、點檢使し稱し己の國に招きし、其禁中の内旨ありし

表し、其水を挾んで天下を却さん、其奸謀也、其罪二

神祖以来未嘗仰も賜る外國の耳目として未抗を許し去る  
敵未も去る和業私に猥に砲殺し

神祖の法を犯すを罪三

然るもつへに捧表し事をさ比一旦

勅使も出し言ふを罪を問せられさるる去る量の高恩ふらばや

右に以て糾問してさるる幕府の使臣を謂れや、暗殺せし

ハ卑怯を極逆命し大罪を罪四

天道昭々陰謀忽暴を詭し 禁中より不審ありて

闕門し教言傳布文を仰付し命を拒み

双車轂し下す事を奉んとは

朝廷高擡したまは早く可引拂旨し

勅旨を下し去ふに依て奸人初て人教を引揚事れを於三條

以下の人しを去國の伴ひしを罪五

其時征伐し師を向らぬ罪を鳴して征伐せられぬ一言半句の中

訳をへし然るも捨別の仁恕を以て自改の期を待れし、洪恩

と辨はれ非坐し企止去り去子言大孫父子の軍令状を、持

鐵騎戎裝京師へ乱入し

禁闕へ向て祭碑、長門を噴霧して軍卒を率ひ海路鞆に出張  
せしむる源平已未未嘗有し大逆無道南山の竹を以て書  
尽し短く一し毛髪を抜てもたふし容易天地の大逆罪を  
罪六

第七

如し実し主人の志中よあは果して三臣等の奸謀に出し  
ふら速し罪魁の首を刎ね徒跣し幕府に依罪の命を乞へ  
き苦あふ父子を勧めて隠忍割腹の企をふさしむ其罪七

第八

海舟書屋

如し不容易罪を犯して覆冥改悟せざるより尾張前大納言  
殿忠督として追討の際に臨み始て三臣の首を斬り悔悟伏  
罪の旨を述ぶ緩急し罪不軽刻へ謝罪状を前大納言殿  
より幕府へ伺れしと云ふ事

朝旨幕命より亦裁許なき限り天下萬世報敵の罪名を  
ゆるされざるあり忠をも私意を以て天下の大法を誣犯し  
朝旨を抗せんとも其罪八

第九

幕命より背て暴動し搦手を唱て受取を破装しふら軍  
機領海に迫り撃破せらるし及び脆くも自判の降状を授け

強し

朝命幕令に意して無餘義破撃せし旨を偽りて、罪を  
朝廷幕府に推柔し、私に交款を結ぶ往來を運送し其  
罪九

第十

其佐將之き事多きし依て 將軍に進獲於寛大し  
恩惠を以て亂向し為り大坂にて三宗家以呼出し交病し  
托しふも出正儀の宗家とも罪名を以てし此も罪十

第十一

然るも天地に洪恩拾分の寛典を以て亦曲り差向し上

海舟書屋

勅旨 幕令を奉りて関元境に臨み難誤解を以て為り末家  
吉川等も呼出せしも美當病し托しふも出正儀任向事し  
罪十一

第十二

其末つとも病氣の旨にて名代ふも出正儀実戸備後分美  
も蓋て一門も其も身分難交あり交儀一門の養子に後  
為名代美出為り一途の内用出獲取し居ふも病て病氣  
のりも不中立六月朔日為り裁許し呼出の朝子玉り做し  
持物付起居難成由り以押ても難出吉強て及り此  
天幕に命を以て難慢事其罪十二

第十三

所裁許三末家之仰自少至士民情實不折合于折途  
子而為之在支大儀父子之仰裁許之者不在途折之款預書  
取獲獲獲滿之上連之發中之者之罪十三

第十四

備後介代病氣之候自多より中立名代の以用之在勤之付  
右以用之發之成之免當人平分三付子細有之國泰寺の呼  
出之在又之病氣中立之在出依之病幸全法之在連之獲  
滿之在須之在成之在安養寺之發言當人教之在合之在  
為之在發言當人教之在合之在命之在發言當人教之在合之在

其用向之在在勤刻之身分終之在在又之在須之在成之在昔  
貞丸初末家吉川等之在連之在成之在上之使是是滿之在成之  
有之在又之在勿滿恐縮之可成之在在又之在又之在後介之在成之  
其後儀之在在向之在上之兵馬之在在在臣子之在在在  
之長防二州備後介之在領之在在毛利之在領之在在果之  
之毛利家祖先已來之舊領之在在後介の在為之在兵馬之在  
之在出之在命之在拒之在所裁許之在連之在却之在主人之  
罪之在在也其罪十四

案之在征長の之趣之在訂盟之在出之在案之在案之在  
事之在在在政府之在在在在在在在在在在在在在在在在

明告も事なく不審の件ありと云ふは是れハ  
 國國の人民其趣告を解するべきを扱玉に戦陣に臨む  
 の士に之を何事かの故を以て歎歎ありしと云ふを知る者  
 少し元来誓詰の文を簡明嚴肅其罪を鳴らしてこれを  
 公衆に知らしむる古今軍機の大要緊要務にして  
 これに由り全國の人政府已む事を得て干戈を動  
 きの主告を知りて戦闘の士をこれに以て踊躍奮興  
 歎歎の心を固より各競て執効を圖るべきを論る侍は  
 老より事此に出たりて天下を以て無名の暴舉ふると疑  
 へし其後我々戦士も勇奮の氣を振ふ由り矣麻

海舟書屋

内潰れ終つては最失策の大有る者といふを一決や郷々  
 大小監察をして罪状の首を糾問せし時彼れ遂に一  
 辨解せし後ふふ却して既往の罪を責彼をして十分の  
 辯柄を得せしやを頼むに順序條規を失し加へて其國  
 公使の告の言も晦渋瑣碎立言の節を得て顧て彼が  
 類々訴ふ所の言も是れ明暢痛快なく情を訴へて  
 彼れ人をして感服せしむる者あり其文章の一段たるは  
 彼れ我れ敗の教已に判る處ありといふ

六月十五日井伊掃部頭届



私忠軍昨十四日曉神原式部大輔忠軍陸軍奉行竹中  
 丹後守吉兼の歩合の通る岩園に討入り獲討多分配本保  
 土依二番手戸塚左太夫三番手河合主水大井村の早天線  
 詰軍目付朝倉兼十郎も出張敵陣を撃つ勢列の上段  
 天朝之仰出趣為中少使番竹原七郎兵衛曾根佐十郎  
 其添小瀬川渡越り交賊勢防備不振村共八幡村より大小砲  
 歩掛り付直り大砲隊前進の八幡山臺場を始り樹間屯在  
 一揚不目的に大小砲嚴交防撃振村より放火の物振賊勢  
 三百人許小瀬川を渡り不図獲抄大竹山より大小砲亦即  
 連り味方の後山に屯あり南方海道より式部大輔の人数

海舟書屋

一賊勢砲戰迫来り付東の方字七面山と唱り至山へ轉陣待  
 交り処に故進撃の二三番隊より後を賊勢分配後途を遮り  
 付勇味村へ分配山村へ地利を去り列戦後龍を防ぎ其  
 三方より取圍死地に陥り苦戦を交兼白約より陸軍  
 方新渡りも亦掛意援も無く付午後四時以り方  
 宿邊より三隊引纏り致波宿へ引揚り  
 旗中先手貫名筑後より後米小瀬川を助管り坂に押返  
 美川村に纏り早天營へ坂へ出張敵の處從坂上押来  
 交方一樹間より烈交砲撃敵の自接戦味方一大小砲  
 損手詰り地利を去り賊勢より方右向り可成接戦又筑後

後致九二當了疾走二自後備橫地左平太兵隊繰出入勢  
嚴矣防戰莫管取歸二交先手之始也苦戰之機二未一賊  
勢山上之彼了轉來中營近之攻進勢二自守四十八坂一  
死知轉陣同姓兵部少輔人教之淺平一出張一襲本殿書と  
烈矣破戰故二内忠軍七纏ウ二交山下海道二守也始戰且場逢二村  
七悉く火移了轉衝之失八急撤拔失何分也在彼二論也書二  
於大野村或部大輔中合伯耆守殿一幸柄中立右伺二上廣  
書表一ト先引揚廿日市擇二之旗中二之廣流々右衛門隊を  
殿備古急呈至了八人知死傷一後之取調一上跡了可中達二  
此後以届了上以上

海舟書屋

六月十五日

井伊掃部頭

阿部豊三後書

松前 伊豆書

其方共候内役中不行申候也  
仰自替居可矣在

飛井隠岐守届

去ル昨日内届申上通城邑四方既二取圍救應無一孤城獨  
立了未成一折柄長州了軍目自二及直接度一旨申入了也



中御討々 仰出當長專攻擊中ニ付テ此上所用銀ノ尺振也  
ト云々 且々何世何振表外臨時ニ出方可有也 勘計六方  
所後計向取續方ノ手段ニテモ少程ノ仕役ニテモ在存振  
ニ此場合ニ云々

上ニ云々 此上成りノ交同州一同深ク心配故ニ此後手向ノ事  
思召ニ此上成りノ交同州一同深ク心配故ニ此後手向ノ事  
此勘定外他役ノ者ニ在渡レシモ此上成りノ交同州一同深ク  
何とも云々 趣志後降ノ事ニ在留中、趣志石モ組文取末ニ云々  
何れモ云々 精々中々云々 振可々 故ノ事

海舟書屋

大坂市中用金ノ論書

公儀累年所用途ノ為テ淺紙中天保度以來云々 乍恐  
中當代ノ為成度ノ事ニ此上成りノ交同州一同深ク心配故ニ  
端々為在珠友度ノ事 所上洛川後今般  
所進茂ニ自當代中在城若月ニ在成彼是臨時所ニ所用  
途ニ助奉ニ能美前代末等ノ有莫大ニ此出方在當ノ地上  
此取賄方種ノ事ニ此上成りノ交同州一同深ク心配故ニ此後  
柄々於此ノ方モ恐察可也 在代ニ云々 當代人モ云々 右并云々  
所回恩ノ辨度ノ格別ノ事 所用金上金昔未勤ノ候モ云々 當  
表ニ候々 余國ノ連金銀融通才一ノ土地ニ身元無取所人

其後年平住改渡世在近日亦融通一紙在少法物價格別及  
 修其諸民改困亦病の指柄也且五月以來 市立指二付の供方  
 小用高昔未動右二付も亦く難法し以才可右二付之至六海  
 其為厥厚き小類忘を以右難法の所小有方、依り當今、高小世  
 諸之知五下第二方し又先前小用金の下ヶ度方昔し其も右根度  
 之小要筆未成の第二付是の所人共存高し程を以心配は為遊  
 此度申年二十五年度し以用金の手高せ一付小下ヶ渡く小法  
 可成下指のく是と違々小務年向小取荒う和進く小補方、小基  
 中も之而立度、の 思も以今殺改白大坂并兵庫西宮町人  
 十の内才元五と考右に指別し小用金と 仰自在此度し其て

海舟書屋

先前、振合二不拘小用金也二自一統之旨を厚き心得當節  
 の容易の冊勢於

公儀程々、以心算才和建の以才柄も深き恐察承、太平に  
 所國內、安住を其小思深冥加、程を、重く右糸路、才  
 後手、和懐を、其深右の務中向小基、才和建、以趣意を、一  
 途、心懇誠心をも令し小用亦未成、和改度、事、依、小用金  
 吏、才元二應、割渡、可、格、一同、割、前後、見合、せ、又、  
 吏、是、一、志、勤、酌、一分、限、心、力、を、奉、一、速、以、後、可、中、高、九、今、殺  
 小、用、金、請、高、當、年、中、月、割、皆、上、納、也、仰、自、小、下、ヶ、度、し、其、  
 其、外、年、より、三、拾、ヶ、年、賦、割、度、一、年、即、告、以、其、高、下、下、入、每、年

振河播、以收納を以て下々渡可なり、右に收納金、一、萬、五、千、六、百、  
 切、一、法、柄、三、十、七、也、此、度、以、仕、法、往、年、二、五、百、二、十、七、決、以、此、變、早、一、六、  
 迄、以、蘇、所、人、其、安、心、可、收、以、右、を、以、引、當、に、成、立、に、由、り、上、り、能、  
 有、幸、存、在、也、聊、而、後、一、年、危、殆、出、獲、可、收、以、右、に、自、拾、お、心、底、  
 誠、実、を、以、以、法、中、上、者、を、信、言、出、金、品、も、時、に、一、百、兩、三、百、兩、  
 譽、也、助、以、以、沙、汰、も、ナ、リ、も、其、後、も、能、有、亦、別、收、一、法、之、可、及、力、  
 大、ケ、出、精、お、励、ハ、極、可、收、ハ、  
 右、に、趣、以、下、知、厚、ク、中、論、ハ、奈、何、れ、也、此、度、以、以、趣、意、會、得、以、  
 以、用、途、未、了、也、毎、一、ツ、振、以、法、可、中、上、  
 右、以、用、金、惣、言、

海舟書屋

七百方支

一軒三百支あり廿一方支し由  
 一軒二百廿方支あり廿八軒あり由

右、大坂町奉行松平大焜守并上備後守より申渡也、是  
 上、度、以、以、用、金、を、仰、付、之、也、以、收納、以、引、當、に、以、由、事、也、  
 殊、此、度、も、江、戸、に、勿、論、諸、國、以、料、不、も、亦、仰、付、之、上、金、  
 也、も、只、一、ト、通、以、以、用、金、三、百、切、以、引、當、又、以、以、子、當、の、如、事、  
 以、仰、付、也、之、以、大、坂、一、法、中、上、渡、二、及、右、に、以、何、し、主、意、  
 有、り、也、と、以、子、中、合、入、り、  
 一、申、進、度、以、入、用、尺、積、一、ケ、月、  
 一、金、五、万、三、千、七、百、九、十、九、支、合、計、

内信方より内子寄方程用并職人より手寄也

一金比万八千七百七十支余

四百俵以下旅出扶持并石代渡

一 米比千八百四拾八石六斗五升余  
金三万七千八百五十九支三分余

内信方粮米秣之外取渡

一金壹万三千八百七支余

内軍器之外内道具類新規出修復之余取渡

一 米千五百十九石三斗四升余  
金四万支

藝地粮米内用支金分

小以ノ米四千三百六拾八石三斗余

海舟書屋

金拾七万四千四百三拾五支三分余

一金三百拾五万七千四百四拾六支余

内進費之 仰出ノ費之 内進途并大坂

内信方留中子九月より寅五月中迄内供ノ向手寄金

旅出扶持方石代金其外

一金百拾壹万九千六百五拾支壹分余

寅六月より同十二月中迄 内進費内信ノ向手寄金

旅出扶持方石代金之外内積

水野痴雲筆記

臣家茂儀初夏以來深疾臣在其後療養未加快和趣  
處當月初旬方再感既此程

初使之以蒙 寵問安之過分之鴻恩感戴之次身  
然之病勢弥進不堪執務間此上危萬臨  
家族慶喜之相續為仕在防長之義至急之付  
名代出張為仕度此段

初許之 御沙汰成下孫奉願

七月 臣家茂

勅諭

海舟書屋

大樹可勝連之美重之付危急之節一橋中納言相  
續為政在長防之儀至急之付名代出張為政度  
中納言趣被 岡倉之事

一橋中納言殿

此程中より中不例之為事交進之申疲勞之為増之付此  
上申危萬之付為事之 所相續之義之仰出止防長  
進討之義之旨為 所名代出張成之孫  
思之儀之別紙之通  
所所之 仰上之旨其後之心得可之旨之旨之仰出此



段中上様との 序意二

七月十九日卯時、大君の御高き、予憂憤不堪、  
一言を閣下呈云

當今中國勢甚切迫、任北大災列、  
何とも不可成、四分五裂、  
一時も難く、  
不可も中出、  
必の遠大、  
存の、  
小臣日夜悲歎、  
披中上様結兵

海舟書屋

より既一敗而已、敢て士夫吐氣、  
紛々恙々、  
小軍無も、  
仰自、  
隊、  
一、  
台、  
紛擾、  
内地、  
人氣止、

此方以下は中世の故の失新として不存の臣愚僻身命を  
不顧の上も恐入らせ不悔痛歎區々相誠幸の上

七月廿日又一書を呈上云

小臣務志悲歎仕は此事は中世の事今結兵終一捷報も  
無し悲二億の時日を消し極國難を成し折柄天  
為一我 君上の為に事多きを降さぬハ一朝諦不可言  
の形勢も亦変不可言 君上の病席ニお渡ハ萬緒先  
御後及し此事お速に一掃振ら悉くは任せ遊習天下  
し変動を承見し進み進み事存し悉く上  
君上し小倉表に滑泊仕居る軍艦を以江戸に

海舟書屋

還中お成り次第と事存り考埃々天下も亦二因り何分や  
可お成外実し物中場不々事存る鳥くお熟考は遊小果  
決最の急務と事恐事存るお陸路 還中お成り天下  
し人心多き薄書を踏折柄も多し混乱も亦不可言  
物中御執念仕に存り交遊も由し入る事以上

七月廿日

因備定白

長防の討入り日旅三軍并伊柳系始蒙 台合下の変更は縁  
利の様子多し取ら義命は中世の時期は彼は忠謀の上も事思入

治世、堂々たる、神物浮波、境令、此中、是る度、建言  
 仕り、有、採、用、無、し、却、り、終、成、り、件、に、少、く、有、り、候、令、一、家、存  
 亡、仕、に、由、り

皇國、真、亡、三、拘、り、九、牛、一、三、三、存、候、る、所、願、前、死、言、上  
 仕

一 長防、以、討、入、候、連、合、仕、會、津、中、將、後、寸、刻、も、予、く  
 帝、都、以、守、衛、免、加、賀、守、相、に、仰、付、事

一 小笠原、是、以、後、此、度、於、糺、野、表、取、討、方、士、民、一、同、に、落、志、し、  
 箇、条、少、し、も、予、に、在、候、御、事、に、以、て、是、に、仕、度、候、事

一 長防、一、舉、に、以、討、入、候、由、根、元、主、政、事、私、意、有、り、由、主、大、  
 海舟書屋

件、轉、に、取、取、討、候、事、如、く、次、才、に、仰、立、御、軍、引、出、引、揚、定、大、  
 への、支、主、に、成、り、自、然、幕、府、に、由、仁、徳、列、國、并、に、為、民、並、後、  
 仕、に、必、出、し、候、幸、存、一、條、出、格、に、此、恩、惠、に、お、為、度、候、事、  
 乍、思、徳、川、家、も、今、日、に、迫、り、候、外、藩、孤、絶、し、志、も、有、り、候、令、  
 如、く、候、台、會、中、に、在、り、兵、士、も、以、て、候、事、に、情、定、明、鏡、に、照、  
 し、明、亮、と、幸、存、の、私、也、若、し、一、蒙、大、恩、に、分、此、侍、儀、候、仕、に、  
 中、外、不、意、の、事、に、有、り、他、思、考、し、懸、念、来、此、度、但、馬、伊、木、長、門、  
 等、出、る、所、不、審、し、件、に、此、糾、問、に、下、度、於、若、死、此、度、建、言、仕、  
 誠、謹、恐、頓、首

七月廿六日

松平因幡守

同月美濃守相渡

松平右近將共去月十六日長賦龍來益田表一戰後度  
苦戰勇闘不立ウ安達ニ防備ニ術行居兼不得止去月十八日  
渡田城及自燒ウ候跡抄(至ニ)去可為殘念ウ事  
取敢赤井一學(至)且市尋(至)金十友(至)下(至)候事連(至)  
事

板倉伊賀守相渡

毛利真丸家来突戸備後介水田村素太郎美濃守(至)番(至)美

海舟書屋

有(至)松平宗蔭守(至)内預(至)成(至)安(至)此(至)度(至)於(至)蔭(至)抄(至)度(至)山(至)島(至)表(至)伯(至)耆(至)  
守(至)今(至)一(至)已(至)美(至)畧(至)以(至)守(至)歸(至)國(至)為(至)政(至)以(至)外(至)美(至)自(至)伯(至)耆(至)守(至)  
弟(至)大(至)坂(至)表(至)為(至)内(至)中(至)外(至)間(至)上(至)玉(至)當(至)内(至)下(至)可(至)考(至)候(至)  
付(至)聊(至)為(至)終(至)意(至)是(至)通(至)可(至)心(至)得(至)  
右(至)通(至)口(至)討(至)子(至)向(至)右(至)連(至)下(至)内(至)位(至)万(至)石(至)以(至)上(至)以(至)下(至)而(至)可(至)  
右(至)連(至)事(至)

松平伯耆守

右(至)牧(至)野(至)越(至)才(至)守(至)内(至)預(至)元(至)伯(至)耆(至)守(至)旅(至)録(至)美(至)至(至)諸(至)事(至)  
取(至)締(至)向(至)吾(至)可(至)心(至)得(至)

松平伯耆守

松平公義多正是也此頃在成庄川突戶後後介是達之伯耆守  
其許一己之取計を以美度川に付て、惣軍の氣配を沮つて  
勿論其他不容易の都合に立ふるも、早是、何苦し、凡拵  
有し、如斯取計に及ぶべし

一同人美度川期に當り夜中竊に其許宿陣に呼寄り合はれ  
有し、如く、趣も右ツツは、何苦し、夜中合はれ、事には

一 何月幾日幾度か

一 美度川古趣に付其許在幕中、渠より何と云中、出は後、有

海舟書屋

之に於

一 前段、趣何と云、此竊に中、立寄り、後右を偏信取計の事  
も、此止美度川方、手、續、其、中、義、多、正、家、来、中、付、取  
計、此、或、其、許、家、来、為、取、計、の、事、に、於

右、趣、逆、一、覽、答、言、可、也、也

八月

此時の形勢、衆議い、り、作者守の位置を以て、大失、公、衆、と  
ふ、則、後、可、然、ふ、と、云、者、多、一、誠、に、驚、く、へ、く、歎、げ、一、き、し  
至、り、嗚、呼、衆、人、何、の、心、を、や、軍、の、奮、は、る、ハ、別、に、一、因、り

記す。諸軍の弱而已。や陰にそ非を云て。謀くは水も  
 進て一戦君辱を雪く者ふく。宜に龍散一國財穀竭して  
 而後。後背徒。謀くは。ハ。何事。之。や。宜。足。固。心。必  
 きたり。あり。我。答。す。く。あり。舊。地。を。唐。津。固。老。の。所。置。意。く  
 旅。人。後。世。其。非。を。い。ふ。者。殊。多。し。終。子。に。地。を。居。る。能。は。伯。妙  
 を。い。其。跡。を。踏。ま。し。た。已。れ。小。倉。を。移。り。て。西。國。を。督。役。せ。ら。る。ん  
 と。ふ。く。伯。妙。人。の。不。復。を。察。し。ま。し。兵。戸。某。を。捕。へ。し。殊。に  
 失。策。を。て。益。彼。士。民。の。激。怒。を。増。さん。と。も。二。志。り。旅。に。告  
 げ。た。全。く。一。己。の。決。断。を。以。放。策。せ。し。ま。う。と。云。此。時。の。形。勢。亦  
 特。唐。津。に。得。ら。れ。た。一。し。所。せ。り。と。も。人。々。を。將。に。知。し。抑

海舟書屋

此。事。二。三。の。小。人。頗。る。事。を。非。ひ。而。措。皆。を。以。て。失。し。終。に  
 浩。滿。亦。誰。の。心。を。啓。き。し。此。人。の。知。る。所。を。以。て。彼。を。ま。し。是。を。明  
 察。す。た。奉。命。通。し。て。意。を。以。嗚。呼。我。兵。弱。き。と。あ。り。且  
 黒。嶽。歎。き。と。あ。り。旅。人。進。ま。ず。諸。侯。出。勢。せ。さ。る。と。云。固  
 心。に。明。み。り。恭。と。滿。を。堅。甲。利。兵。者。と。非。れ。せ。終。に。彼。我。の  
 情。安。を。詳。し。其。中。間。を。去。り。循。て。一。て。幕。令。を。奉。し  
 たり。彼。の。溝。支。を。失。せ。さ。る。ハ。最。も。識。ある。者。と。い。ふ。一。と。あ。り  
 誤。て。一。敗。地。を。塗。ら。ハ。幕。軍。十。萬。何。と。の。地。に。因。之。や。此。時。の  
 情。勢。を。明。察。せ。し。と。あ。り。且。終。に。悟。り。入。り。其。言。も。信。せ  
 ら。る。と。い。は。三。百。年。の。公。評。を。い。ふ。云。は。む。哉

開國起原卷四十九

海舟書屋

